

10 特別の教科 道徳

生徒が課題を主体的に見出す「特別の教科 道徳」の授業研究

—郷土を愛する態度の育成を中心に—

永田 郁子, 山下 亮

本論の要旨

本校の教育目標は「郷土を愛し世界へはばたく心豊かな生徒の育成」であり、「思いやりや感謝の気持ちを育てる心の教育の充実」を重点課題としている。さらに、本年度の研究では、生徒が課題を主体的に見出す学習指導において、実社会に生きてはたらく力の育成をすることを目指している。本校の総合的な学習の時間「BIWAKO TIME」（以下、「BT」）のさらなる充実のためにも、郷土に対してどのように向き合うのかということについて生徒に自覚させ、新たに自身の課題を見出させ、実社会に出てからもその課題の更新に努められる力を育成することが必要であると考えた。

そこで、本年度は「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」の価値項目に照準を絞り、研究を進めた。生徒自身の考えを視覚化するのに思考ツールを活用し、探究的学習活動の要素を取り入れ、その中から見えてくる生徒自身の郷土に対する思いを明らかにし、その分析をさらにBTの改善に活用することを目的とした。

■キーワード 郷土を愛する態度、探究的学習活動、思考ツール、カリキュラム・マネジメント

1. はじめに

本校では昨年度、「道徳性を育む、自ら考え議論する道徳授業」をテーマに道徳の研究が進められ、平成30年9月1日に開催された本校の研究協議会において公開授業および教科別分科会の場合もたれた¹⁾。第3学年を対象とした「C 社会参画、公共の精神」の項目を取り扱うものであり、教材は滋賀県教育委員会編集の『近江の心』収載の「近江商人の矜持—初代伊藤忠兵衛—」が使用され、生徒同士の議論を促進させるだけでなく、道徳的実践力についての自らの考えを可視化させ、整理させるものとして思考ツールが活用された。

本年度は、地域性を重要視し、思考ツールを効果的に用いるという昨年度の研究の基軸はそのままに、さらにカリキュラム・マネジメントの視点を取り入れることを試みた。本校の学校教育目標は「郷土を愛し世界へはばたく心豊かな生徒の育成」である。この達成にむけてBTをはじめとする総合的な学習を幹とした教育活動が展開されてきた。さらに、本年度の研究では、生徒が課題を主体的に見出す学習指導および実社会に生きてはたらく力の育成をテーマとしている。これらのことから、「郷土

の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」の価値項目に照準を絞り、研究を進めることとした(図1)。中学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別の教科 道徳編(以下、「H29 中学校解説道徳編」)の「内容項目の指導の観点」における「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」の概要には「『郷土』とは、自分の生まれ育った土地ないし、地理的環境のことである。また郷土とは文化的な面を含んでおり、自らがその土地で育てられてきたことに伴う精神的なつながりがある場所を示している。」とある。

滋賀県が継承する文化や抱える諸課題について、生徒たちはBTで具体的に研究を進めているものの、郷土である滋賀県に対してどのように向き合うのかということについて、深く考える機会が設けられていない。道徳の授業でそれを生徒に自覚させ、新たに自身の課題を見出させることが、BTに臨む課題意識をさらに深化させることにつながるのではないだろうかと考えた。郷土に対して「精神的なつながり」を感じさせ、郷土のよさや課題を見出す主体性を高めることを目的とした授業のあり方を提案したい。

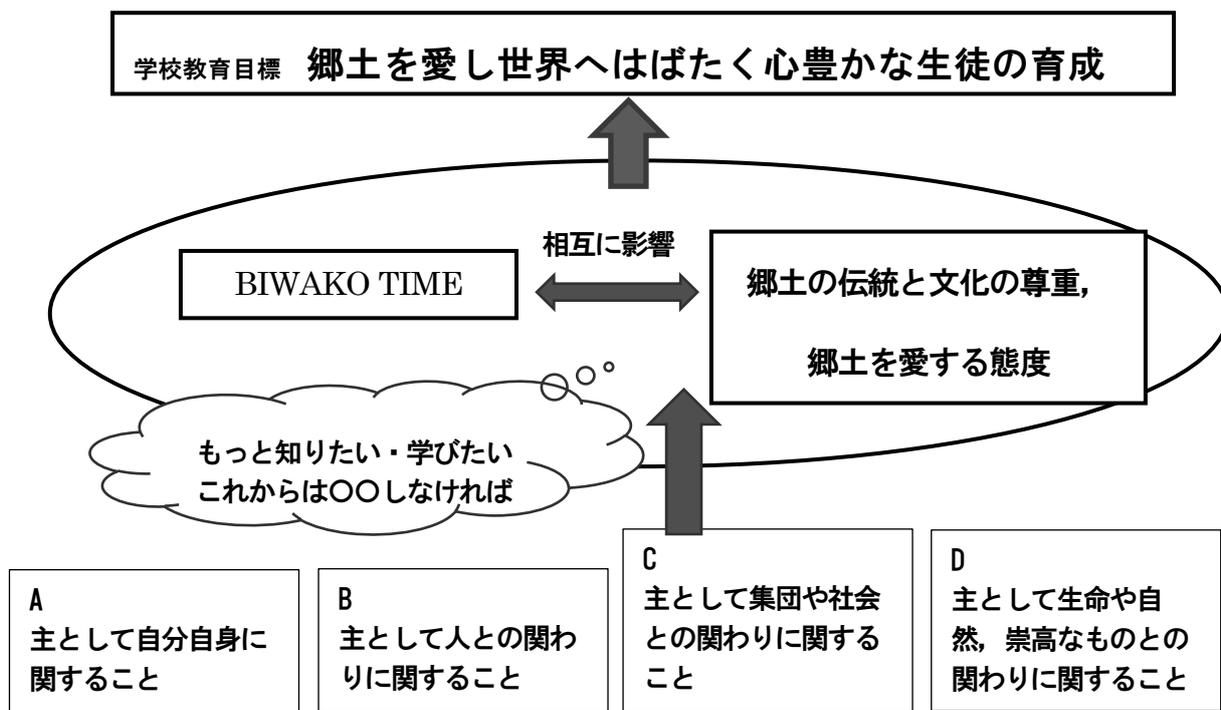


図1 本研究のイメージ

2. 研究仮説

「特別の教科 道徳」において「郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度」の価値項目の授業を実践する場合, 生徒に思考ツールを活用させることで, 生徒が自身の「郷土を愛する態度」により向き合いやすくなるだろう。

3. 研究体制

(1) 所属学年・分掌を超えた担任教員の研究チーム

令和元年(2019)8月31日に開催の本校研究協議会に, 第1学年・第2学年それぞれで授業を公開するにあたり, 複数の教員でチームをつくり, 研究を進めることとした。メンバーは, 道徳推進教師である永田(2年B組担任), BT主任である山下(1年C組担任), そして生徒指導部の牧野尚史(2年A組担任)・藤田範子(第3学年担任)両教諭である。

新指導要領を確認し, 教科書教材について意見を交換し, 各学年・学級の生徒の実態に根差した提案を目指した。

(2) 先行授業および授業研究会

7月には, 研究協議会に先立ち, 当日に道徳の公開授業を実施しない第1・2学年の学級すべてで先行授業を行った。

1年B組, 2年C組についてはそれぞれ学級担任による授業を実施し, 研究チームをはじめ他教員が参観し, おもに教材文の課題となる点や, 視聴覚教材の活用について意見交流をした。

続いて, 1年A組は学級担任が, 2年A組については永田が授業を実施した。これらについては, 滋賀大学教育学部より, 三輪貴美枝教授, 太田拓紀准教授に参観していただき, 授業終了後に研究会をもち, 以下の通りのご助言をいただいた。

- ・1年の授業については, 教材文の内容に近接しすぎており, 多様な考えを表明しにくい展開であり, 逆に2年の授業については教材文の価値に迫っていないままに生徒に自分の意見を出させており, 表層的であった。
- ・自分ごととしてとらえられていることが, 議論をはじめの前提となる。滋賀県のなかでの具体例を認識させることが肝要である。
- ・1年の生徒は教材文に登場する理想化された中学生と自分たちとの間にギャップを感じていた。ふるさとを離れることは悪いことではない。ふるさととは, 単なる地域を指すのではなく, 人とのつながりがそこに含まれる。「自分にとってのふるさととは?」に立ち返れる展開がよい。
- ・2年の生徒は, 教材文に登場する中学生に根底的には自分たちと共通するものを感じている。そのように行動をしたことはないけど, やってみたい気持ちがある, といった様子か。「地域のよさを伝えられる」というコミュニケーションの側面に生徒の関心が寄ってしまった。登場人物の心情により迫らせたい。

・両学年とも、価値のゆさぶりが見えにくい展開であった。郷土についての学習は何のためなのか、生徒一人ひとりが発問をもとに探究を深めることができるような仕組みが必要である。

以上をふまえ、夏季休業中に研究チームで再度研究会をひらき、指導案作成にとりかかった。以下、研究協議会公開授業での実践を報告する。

4. 実践報告その1 (第1学年)

(1) 主題名：「ぼくのふるさと」

*内容項目 (C (16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度)

・使用教科書『私たちの道徳 1』(東京書籍)

(2) 主題設定の理由

生まれ育った郷土は、よりよい人生を送るためのよりどころとなるものである。郷土とは、自分の生まれ育った土地のことであるが、場所のことだけを示すのではなく、自らがその土地で生まれ育ってきたことに伴う精神的なつながりも含めて、郷土である。そこには、その地域に住む人々により長い間維持されてきた習慣などの文化様式が存在する。自分の郷土に親しみを感じて、伝統文化を受け継ぎ、郷土のためにできることを始めようとする作者の姿から、自分自身を振り返り、ふるさとのために役に立とうとする意欲を高めたい。

本校は学区がないため、生徒はいろいろな地域から登校している。したがって、公立の中学校に通う生徒

と比べると地域の行事などに参加する機会は少なく、自分が生まれ育った地域との関わりについては、やや希薄であるように感じる。また、普段の生徒の声を聞いていると、憧れから将来的には都会へ行きたいと思っている生徒が多いようである。

以上の点をふまえ、本授業では自分の生まれ育った地域の発展のために貢献したいという同年代の中学生の考え方について触れ、自分自身が生まれ育った地域と今後どのように関わっていくのかという部分について級友と意見を交流させることに重点を置きたい。その上で自分の考えを練り、多面的・多角的な視点から自分の生き方を振り返らせたい。

(3) 主題の学習目標

ふるさとを愛し、ふるさとのためにできることをしたいと願う作者の気持ちに触れることで、郷土意識を深め、すすんで自分が生まれ育った地域や場所の発展に努めようとする態度を育てる。

(4) 主題の評価

①自分のふるさとで働きたいという作者の強い思いを深く共感できているかを、級友と意見交流している様子の観察や、自分の意見をまとめたワークシートなどの内容から把握する。

②作者のふるさとに対する思いを踏まえ、自分自身のふるさとに対する思いやこれからの自分自身の生き方についてどのように考えているか、授業での生徒の発言やワークシートの内容から把握する。

(5) 本時の学習過程

	学習内容・活動	○指導 ◆評価 ★課題を主体的に見出す方策
導入	1. 自分の『ふるさと』について考える。 ○「あなたの『ふるさと』は、どこですか？ また自分のふるさとのよいところは何かですか？」 ・滋賀県 ・〇〇市、△△町 ・自然が豊か ・特有の文化がある	★隣同士で交流させる。
学習課題 自分が生まれ育った「ふるさと」について考えよう！		
展開前段	2. 串原村について知る。 3. 資料を読んで話し合う。 ○「串原村の課題とは何だろう？」 ・人口が少ない ・高齢化が進んでいる ・不便	○スライドを利用して串原村について紹介する。 ○次の発問につながる補助発問として取り入れ、串原村のいろいろな課題を確認する。

	<p>○「作者が、『大人になっても串原村で働き、村の発展のために努力していきたい』と考えたのはなぜだろう？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お年寄りだけ残しては村がだめになるから ・大好きな串原村で働くことは串原村を守ることになるから ・都会もよいけど、生まれ育った串原村がなくなるのは辛いから 	<p>○串原村にはいろいろな課題があるが、その課題を乗り越えようと努力する作者の思い（ふるさとに対する愛や誇り）を、確認する。</p> <p>◆評価①（取り組み姿勢、ワークシートの記述）</p>
展開後段	<p>4. 自分のこれからの生き方について考える。</p> <p>◎「あなたは自分のふるさが好きですか？また将来は作者のように自分のふるさどで働きたいですか？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生まれ育った場所は好きだけど、都会で働きたい気持ちの方が強いから ・自分のふるさどには目立つものはないので、将来はふるさどを出て仕事に就きたいから。 	<p>★4象限マトリクスを利用しながら、作者の思いと自分自身の思いを比べながら、自分がそのように思う理由について、4人グループで交流する。</p> <p>○作者のふるさを思う気持ちから、自分のふるさとに対する思いを見つめさせる。</p> <p>◆評価②（発表の内容、ワークシートの記述）</p>
終末	<p>5. 本時のまとめをする。</p> <p>○「この教材を通して、考えたことをワークシートに記入しましょう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まであまりふるさとについて考えたことがなかったが、ふるさとについて考えることは大事だと感じた。 ・地域の行事にも参加するなどして、ふるさを大切にしたいと感じた。 	<p>○自分のふるさとについて改めて見つめ直すことで、自分のふるさとをより理解し、自分の生まれ育ったふるさを大切にしていこうとする姿勢につながることを伝える。</p>

5. 実践報告その2（第2学年）

(1) 主題名：「祭の夜 郷土の魅力にふれて」

*内容項目（ C (16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度 ）

・使用教科書『私たちの道徳 2』（東京書籍）

(2) 主題設定の理由

生徒たちは平素の特別活動においての自分を周囲のために役立たせたいという意欲はあるが、あらかじめ決められたことを日常的にこなすというレベルにとどまり、リーダー性を発揮したり、新たな提案を示したりすることには躊躇する生徒が多い現状である。しかし、中堅学年となって1学期が終わり、班活動や生徒会活動への参画の意識に変化が見られ、上級生としての自覚も高まってきている様子がうかがえる。BTでは一部の生徒がリーダーの役割を担っている。その一方で、学校生活への慣れや発達の段階から、参加意識が薄れてきている生徒がいる実態もある。

本教材は、秋田県の中学生在が実体験を詳細に述べた作文である。他の地方の人との出会いをきっかけに、

自分の郷土には多彩な魅力があることに気づいていくという内容であるが、特筆すべきはその他の地方の人からの感謝の思いが大きな原動力となっている点である。ロールプレイを取り入れ、地域に貢献することの喜びを疑似的に味わうことをスタートとして、中学生の体験を生徒が自分事としてとらえ、「郷土のよさを伝えられる人」として自身のあり方を見つめ直し、さらなる道徳的実践につなげられるようにしたい。伝統文化を受け継ぎ、郷土のためにできることを始めようとする作者の姿から、自分自身を振り返り、ふるさとのために役に立とうとする意欲を高めたい。

(3) 主題の学習目標

資料をもとに、郷土のよさを伝えるために重要なことを考え、自分の意見と級友の意見をふまえ、様々な見方や考え方を理解し、自分自身をふり振り返り、今後の行動につなげる。

(4) 主題の評価

①郷土を愛する態度に関して級友と意見交流している様子の観察や、自分の意見をまとめたワークシートな

どから、より深く吟味できているかを把握する。

前後の生徒の発言や、行動の変化を把握する。

②生徒が郷土を愛する態度について吟味した自分の意見を、どう行動につなげていこうとしているか、授業

(5) 本時の学習過程

	学習内容・活動	○指導 ◆評価 ★課題を主体的に見出す方策
導入	<p>1. 前時のふり返り</p> <p>○「BTが好きな人が言いそうなこと／嫌いな人が言いそうなこと」で交流した結果を示し、共感できるものを見つける。</p> <p>○BTに関する卒業生アンケートの結果を見て、それが示す事実を確認する。</p> <p>※現在の郷土への関心について、BTが元になっていると回答している卒業生の割合に注目する。</p>	<p>前時までの学習活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・滋賀県、もしくは自分の住んでいる地域のおすすめスポットを挙げる。 ・BTが好きな人が言いそうなこと／嫌いな人が言いそうなことを考え、グループで交流する。 ・資料を読む。 ・資料に登場する秋田の「竿燈祭り」の映像を見る。 <p>★ 教室内のスクリーンにスライドを投影し、視覚的に情報を得やすくする。</p>
	<p>学習課題 学校教育目標にある「郷土を愛し世界へはばたく」って具体的にどうすること？自分なりの答えを持とう！</p>	
展開前段	<p>2. 資料を読んで地域のよさを伝える人の気持ちに迫る。</p> <p>○「忘れられない竿燈祭りになった。」と言った言葉の続きを考える。</p>	<p>○ワークシートに記入させる。</p> <p>◆評価 ワークシートの記述①</p>
	<p>発問1 「関西から来た旅行者の人」は「忘れられない竿燈祭りになった。」のあとに何と言葉をつづけたと思いますか？自分でセリフを考えよう！</p>	
	<p>○ペアでロールプレイをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・滋賀県のおすすめスポットを紹介する人。 ・その紹介に対して、言葉を返す人。(前の発問で考えた言葉を返す) <p>○説明した言葉を返してもらって、どのような気持ちになったかを確認する。</p>	<p>○前時取にたずねたおすすめスポットを一覧にし、配布する。</p> <p>★役割を交代して、郷土のよさを紹介する立場・紹介される立場の両方を体験できるようにする。</p> <p>◆評価 生徒の観察①</p> <p>○発問し、指名して答えさせる。</p> <p>○教材文中の人物がどのような気持ちになったかを本文で振り返る。</p>
	<p>発問2 おすすめスポットを紹介した後に言葉を返してもらって、どのような気持ちになりましたか？</p>	
展開後段	<p>3. 「郷土を愛する」とは具体的にどうすることか、考えを持つ。</p> <p>○自分なりの「郷土を愛する」行動を考える。</p>	<p>○ワークシートに記入させた後、マグネット付きのシートにも記入させる。</p> <p>◆評価 ワークシートの記述②</p>
	<p>発問3【中心】 自分なりの「郷土の愛し方」とはどのようなものですか？</p>	
	<p>○考えた意見を全体で交流する。</p>	<p>★黒板に「1人でこつこつ⇒みんなであいあい」「今すぐオッケー⇄未来でスタート」の4象限マトリクスを示し、多様な考え方に生徒がふられるようにする。</p>

まとめ	5. 本時のまとめをする。 ○「郷土を愛し世界へはばたく」とはどのようなことか、自分の考えを持つ。	○ワークシートに記入させる。 ◆評価 ワークシートの記述②
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>発問4 「郷土を愛し世界へはばたく」とはどうすることなのか、自分なりの考えをまとめましょう。</p> </div>		○感想を記入し、ふり返しシートで自分の活動をチェックする。 ◆評価 ワークシートの記述①②

6. 考察

(1) 思考ツールの精選と活用

7月に実施した先行授業において、第1学年では作者・聡が考える村の課題を整理するためにクラゲチャートを用い、第2学年では作者と生徒自身との共通点・相違点を整理するためにベン図を用いていた。これらのことが、先述の授業研究会で指摘されるような状況を生み出してしまい、多様な考えを出しにくくしてしまったという反省点が挙げられた。

そのため、授業中のどの段階で、どのような発問をし、どのような思考ツールを用いるのが適切であるのかについて再考した。そして、展開後段において、道徳的実践力に関する発問を投げかけた際に、生徒が自身と他者との考えの多様さを可視化できるように、第1学年・第2学年ともに4象限マトリクスを用いることを確認した。

○第1学年

第1学年では展開後段の発問「あなたは自分のふるさが好きですか？また将来は作者のように自分のふるさどで働きたいですか？」で考えさせた内容を「好き⇔嫌い」を縦軸に、「働きたくない⇔働きたい」を横軸にした4象限マトリクスをワークシート上に載せ、そこに自分やグループの他者の考えが、どの位置になるかを示させ、またその理由についても書かせることとした。

黒板にも同様のマトリクスを示し、自分の名前を書いた付箋を黒板上に貼らせることで、学級全体の意見がどのような傾向にあるのかを可視化できるようにした(図2)。



図2 授業の様子1

おおむね「ふるさは好きだが、将来そこで働きたい」という意見が多数派であるという傾向が出たが、マトリクスで示すことによって、「好き/嫌い」「働きたくない/働きたい」の度合いが様々であることと、理由の交流によって、それぞれの考えには多様な背景があることが確認できた。

○第2学年

第2学年では展開後段の発問「自分なりの『郷土の愛し方』とはどのようなものですか？」で考えさせた内容をマグネット付きのシートに書かせ、黒板上に示した「1人でこつこつ⇔みんなでわいわい」を縦軸、「今すぐオッケー⇔未来でスタート」を横軸にした4象限マトリクスの中に貼らせ、その一部をとりあげながら、なぜこのような行動を希望するのかという理由を述べさせた(図3)。



図3 授業の様子2

「滋賀県産のお米を食べる」「観光スポットに行ってSNSで発信する」「清掃ボランティアに参加する」「滋賀の神社やお寺のご朱印を集める」といったものから、「家の周りを散歩して、新しい発見をする」「とにかく友達と琵琶湖で遊ぶ」「いくつになっても頭から離れない場所になるよう滋賀ならではのことをしたり見たりする」「人との会話を大事にする」といったものまで、様々な意見が出て、生徒同士の相互理解が促された。

(2) 生徒のふり返しから

○第1学年

次に、第1学年の生徒のふり返りの一部を紹介する。

第1学年（下線は筆者による）

①やはり、ふるさとのすごさを感じました。琵琶湖もあり、田舎でも都会でもないところが本当に大好きです。作者の気持ちもよくわかります。ふるさとは世界に一つしかないのだから、これからも大切にしたいです。

②ふるさとのことを思って働こうとした作者はとても勇敢だと思いました。ぼくもそれぐらいふるさとのことを好きになってみたいととても思いました。

③この授業を通して、今の自分を見直すことができました。ふるさとのイメージは僕と作者で似ているのに、マトリクスで見たら少し意見が違ったのには驚いた。働くところはちがっても、ふるさを大切にするのは続けたい。

④私がこの教材を読んで感じたことは、やはり滋賀は安全で思い出がたくさんあるし、いい町だと思います。けれど、やっぱり私は住み慣れたところで変わらない暮らしをするよりも、交通、環境のよい、自分に合うと感じたところで暮らしていきたいと思いました。将来はまた違う思いを持つかも知れないけれど、今はこの気持ちを大事にしたいです。

⑤今まであまり大津が好きではなかったけれど、みんなの意見を聞くといいところもあるかもしれないと思えたのでよかったです。まだ、大津が好きとは思えないけれど、少しずついいところを見つけて、好きになれるようにしたいと思いました。

⑥私は将来の夢から考えて滋賀から出たい！と思っていますが、作者は村で活躍することが目標なのかなと思いました。なので、ある意味同じかなと思います。大津は高齢になってから帰ってきてゆっくりしたいなと思います。

⑦自分のふるさまで今まで暮らしてきた中で、相手を思うこと、だれかの身のまわりを思うことが大事だと思いました。

①②のように、作者への素直な共感や尊敬を示す意見があるだけでなく、③のように一読した段階では作者と同様と考えていたが、思考ツールを用いた交流を経て、細かな差異に気づくことができた生徒もいた。

④の生徒の意見は、自分のふるさについて愛着を持ちつつも、将来はふるさを出たいという思いを、授業を通じて確かにしたものである。将来に気持ちが変化することを見越しつつも、現在の自分の思いを実感し、大切にしようとする記述に、自ら課題を見出すだけでなく、実社会に出てからの課題の更新を念頭に置く様子が

うかがえる。

⑤⑥はともに、どちらかといえばふるさについて否定的な意見をもっていた生徒らの意見である。⑤は、交流を通じてふるさとのよさを見つめ直すだけでなく、これから自分がどのようにしていくのかという実践の面を明らかにできた。⑥については、ふるさを出て活躍したいと思っている自分と、ふるさで活躍したいと思っている作者とは、その土地に貢献したいという意味で、根底的には同じであるということへの気づきが見られる。両者ともに、二項対立的に意見を振り分けてしまうのではなく、4象限マトリクスで意見の度合いや根拠をていねいに交流できたことによる意見であると考えられる。

先述の通り、授業研究会では「ふるさとは、単なる地域を指すのではなく、人とのつながりがそこに含まれる」との指摘を受けた。先行授業では「自分にとってのふるさはどこなのか」という導入部分もあり、「単なる地域」というレベルにとどまっていたが、⑦の記述のように、「人とのつながり」の面に言及する意見が出てきたことで、一定の成果が得られたと考えたい。

○第2学年

第2学年ではまとめを「学校教育目標にある『郷土を愛し世界へはばたく』とはどうすることか、自分なりの考えをまとめる」という課題にした。生徒の意見の一部を紹介する。

第2学年（下線は筆者による）

①今の中学生の時からほんの小さな事でも、自分なりに「郷土」について考えたり、行動してみたりする。そして、大人になって、どこに行っても、よいところ・悪いところすべてを感じてみて、伝えていくこと。

②郷土について浅くてもいいから広く知っておいて、その中で、自分が興味を持ったことを深めていく。また、知っておいた知識を他の人に広めていくことで、他の人が興味を持ってもらえたら、そこからまた他の人が興味をもってくれたことを調べ、他の人へ広げてもらっていく。

③世界へはばたい時に、郷土のことを思い出し、新しい場所で、文化や暮らし方のちがいを見つけるなどして、それぞれの土地のよさを知ること。また、その新しい土地のこともくわしくなること。

④愛する郷土があれば、大きい世界でも自分なりに頑張れるということ。自分の地域に誇りをもっていたら、他の地域に自慢できるし、別の場所に行っても帰りたいと思えるから挑戦できる。自分

の郷土は自分が世界へ羽ばたくための土台となるという意味。

⑤郷土のことを忘れずに日々生活していく。また、他の人にもそれぞれの郷土があるということを感じて、自分の郷土というのをみんなが愛せる郷土にし、逆に他の人たちの郷土を愛して自分も愛して生活していきたい。つまり、みんなの郷土をみんなが愛していくという考えをもって互いに理解して人と関わるようにしていく。

①②の記述の一部は、すでにBTにおいて生徒たちが実践していることでもある。しかし、BTのその先については生徒・教師間、生徒同士でも語る機会はこれまでほとんど持っていない。これらの記述から、「郷土を愛する態度」の授業が、BTの意欲の喚起へとつながられることが示されていると考えたい。

③については、「郷土を愛する」とこと「世界へはばたく」ことは別個に考えるものではなく、郷土を愛するからこそ世界へはばたくことができるのだと考える様子が見えてくる。世界のよさを知るための方法知として、BTでの学びが生徒の中で位置づけられることが今後期待できる。④は③をさらに深め、なぜ道徳の授業で「郷土を愛する態度」を扱う必要があるのかという目的に迫る記述でもある。第2学年の段階で、すべての生徒がこの問いに応じた考えを持つことは難しいかも知れないが、第3学年の段階では、「なぜ道徳の授業で『郷土を愛する態度』を学ぶのか」という問いについて、考えられる力を身につけさせたい。

⑤では、第1学年での⑦と同様に、「ふるさととは、単なる地域を指すのではなく、人とのつながりがそこに含まれる」というレベルに達するものである。先行授業での生徒の考えは、人との関わりに必要なものは、どれだけ自分の地域について知っているのかという「知識」の段階にとどまっていたが、「人とのつながり」の面に目を向けている考えが見られた。「郷土を愛する態度」と言えば、「自分の郷土を愛する」ことを前提としてしまいがちであり、実際、研究チームでもそれを想定していた。しかし、生徒の思考はより柔軟であり、このように「他者の郷土を愛する」という高い人権感覚が発揮される意見が示されたことは、今回の価値項目に限らず、今後の道徳の授業全般の学習課題を検討する際に心に留めておく必要があるだろう。

7. まとめ

以上のように、「郷土を愛する態度」の価値項目についての授業を実践し、生徒の考えを考察してきた。

各学年ともに生徒を一方に導くのではなく、生徒の現時点でのありのままの考えを起点に、「郷土」に対してどのように向き合うのかという課題意識を明らかにさせることができたと考えたい。

今後、第3学年でどのような課題を設定するのかなど、3年間の指導の系統性をさらに深めることが重要である。また、「郷土を愛する態度」に限らず、「真理の探究、創造」「社会参画、公共の精神」「自然愛護」など、BTに取り組む姿勢や、BTでの研究成果との関連が強い価値項目は他にもあり、道徳とBTが双方向的にその学習効果を発揮することができるような指導計画の作成を試みることもできる。

学校教育の中で、他教科と道徳、BTをはじめとする総合的な学習の時間とで学習のねらいや内容を往還させ、さらなるカリキュラム・マネジメントを図りたい。

注

1 若宮隆洋「道徳性を育む、自ら考え、議論する道徳」、『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要』61、滋賀大学教育学部附属中学校、pp.122～125、2019